

## ■2024年度 計画受賞一覧

### 卒業研究賞

学校名	氏名	研究題目	担当教官	推薦理由
米子工業高等専門学校専攻科建築学専攻	河村謙佑	鳥取県南部町法勝寺における集落構造に関する研究	荒木菜見子	鳥取県西伯郡南部町法勝寺は中世に城下町として成立し、近世には宿場町として発展した歴史ある地域である。明治以降は宿場としての役割を終え、法勝寺電鉄や国道の敷設による環境の変化はあったものの、石州瓦で葺かれた屋根を持つ日本家屋が建ち並ぶ歴史的な景観が現在でも見られる。本研究では、近世から現代にかけて描かれた各種の絵図・地図史料や土地利用に関する史料、フィールドワーク、ヒアリングなどから集落構造の変遷を丹念に読み取り、現在の法勝寺の景観が形成されるに至った過程を歴史的に明らかにした。また、他の城下町や宿場とも比較しながら法勝寺の集落構造や景観の地域的特徴を明らかにした。いまはどの地域においても地域の歴史性を尊重しながらまちの将来像を描くことが求められている。そうしたなかにおいて本研究は法勝寺の地域理解を一層深めることに大いに寄与するものである。
高専 呉工業高等専門学校専攻科プロジェクトデザイン専攻	渡辺陽光	地域特性を活かした空き家整備とエリアマネジメントの実践 ～尾道空き家再生プロジェクトを事例として～	篠部 裕	人口減少社会における空き家問題は、商店街の空き店舗、農山村地域の耕作放棄地等に共通するストック問題といえる。都市部への一極集中といった社会構造の変化も相まって、空き家の住み継ぎや土地の継承問題は深刻化している。これらの問題を解決するには、家族や親族の枠組みを超え、地域住民の理解と協力を得ながら、空き家・空き地を適切に引き継ぐための仕組みや組織づくりが不可欠である。本研究は、広島県尾道市で活動する「NPO法人尾道空き家再生プロジェクト」が行う空き家や空き地を適切に管理・活用する取り組みを調査し、今後の空き家・空き地対策の手法や対策を探る上での基礎的知見を得ることを目的としている。具体的には、空き家・空き地の整備活動について、主に「イベント・作業(こと)・空き家等(もの)」の2つの側面で整理し、それに関係する「組織体(ひと)・活動費(かね)」を踏まえて、尾道空き家再生プロジェクトのこれまでの成果と今後の課題を考察した。
徳山工業高等専門学校 土木建築工学科	江副 聖	国指定史跡大内氏遺跡附凌雲寺跡の3次元復元に関する研究	中川明子	国指定史跡大内氏遺跡附凌雲寺跡は、館跡・築山跡・高嶺城跡・凌雲寺跡の4つの遺跡からなり、その中の凌雲寺跡は山口県山口市吉敷地区中尾の舌状台地に位置する遺跡である。凌雲寺跡は、中世の山口を拠点として活躍した守護大名、大内家30代当主大内義興の菩提寺として伝えられており、豪壮雄大な巨大な石垣を持ち、有事に備えての城塞も兼ねた特異な寺院であったと推測され、大内氏時代の特異な遺構として保存すべきとのことから、昭和34年に国の史跡指定を受けている。 本研究では吉敷地域文化振興協議会からの依頼を受け、山口市教育委員会が発刊した調査報告書、現存する近隣の室町期以降の寺院の修理工事報告書、寺院建築に関する論文等をもとに、凌雲寺跡について推定復元を行い、その結果をもとに、当時の凌雲寺の姿を視覚的に再現することを目指し、室町時代に存在していたと考えられる凌雲寺域全体の推定1/100模型、史跡指定範囲北部にある開山堂の推定1/50模型を製作した。
福山大学工学部建築学科	宮川善也	不登校支援のための校内適応指導教室の空間構成に関する研究	佐々木伸子	本研究「不登校支援のための校内適応指導教室の空間構成に関する研究」は、近年増加の一途をたどる不登校児童生徒に対し、校内での支援空間の在り方を建築学的視点から探求した新しい研究である。 本論文では、東京都における不登校支援の実態分析に加え、岡山県・広島県の校内適応指導教室を対象に郵送アンケート調査と訪問調査を実施し、支援教室の空間構成を詳細に把握している。特に、支援教室の設置形態を「学習中心型」「リラックス型」など6つのタイプに分類し、空間の配置や利用形態を体系的に整理した点は高く評価できる。 本研究の成果は、今後の学校計画における不登校児童生徒のための支援空間の設計資料となるものであり、有用性を有する。 以上の理由から、本研究を日本建築学会中国支部計画賞に推薦する。
福山市立大学都市経営学部都市経営学科	村上千明	高齢者向け居住施設における第3空間の独立性に関する研究	根本修平	村上千明さんは、高齢者向けの居住施設に設けられた第3空間と呼ばれる食堂や居間以外で利用者が滞在できる空間に着目し、その場所を形成する要素や物的な構成の分析を通して、空間的な特性を考察したことが高く評価されます。またこの成果に基づき、第3空間を有する高齢者向け居住施設を卒業設計として提案しました。利用者が多様な居場所を選びながら生活できるこの施設からは、研究の成果が計画において高度に展開されていることがわかります。このことから、本賞の候補者として適格であると考えられるため、村上千明さんを推薦いたします。
近畿大学 工学部 建築学科 建築学コース	丹下智乃	竹原・重伝建地区選定前の調査資料整理と本町通りに面した建物外観写真の特定	谷川大輔	丹下智乃さんは、竹原地区の景観変容に着目し、重要伝統的建造物群保存地区に選定される前と現在の景観を比較する研究を行うことを目指し調査を行った。この調査の過程で丹下さんは、重要伝統的建造物群保存地区選定時に東京大学工学部建築学科歴史研究室が行った調査資料が数年前から竹原市に保存されている事を知り、それらを見ることができたことに恵まれた。この資料群の内容は大変素晴らしく極めて精緻な調査がなされていたが、全てが手作業で体系的な整理が十分に行われていないまま保存されている事が分かった。そこで本研究では、その東京大学工学部建築学科歴史研究室が昭和51年から52年にかけて行った調査資料のうち、まず写真資料(3828枚)に関して体系的整理を行った。この丹下さんの研究によって今後、竹原地区本町通りにおける重要伝統的建造物群保存地区選定前と現在の景観を比較することが可能となった。 したがって丹下智乃さんの研究は、日本建築学会中国支部 卒業研究「計画賞」を与えるに相応しい内容を有していると考え、同賞に丹下智乃さんの研究を推薦する。

学校名	氏名	研究題目	担当教官	推薦理由	
大 学	広島大学工学部第 四類建築プログラム	土居秋穂	角倉英明	論文)津波避難タワーの計画・管理と日常利用に関する研究-高知県内の126基を対象として- (設計) 日常に溶け込む津波避難タワー・避難経路の計画-四万十町興津集落における暮らしの再構築-	東日本大震災以降、南海トラフ地震の被災想定地域において、津波避難タワーが急速に建設・整備されている。静岡県と並んで甚大な被災が想定される高知県内には100基以上が整備された。こうした中、土居秋穂さんは、地域住民がこれらのタワーを日常的に利用することが有事の際の避難行動を迅速化させるという認識のもと、高知県内にある津波避難タワーの悉皆踏査を行い、建物形態などの特徴からタワーの類型化を行い、その計画・管理のあり様と日常利用の実態について卒業論文に取りまとめた。また、高知県南部に位置し、高齢化と人口の減少が進んでいる四万十町興津集落を対象敷地にして、津波避難タワーが地域住民のコモンズとなるようにタワーのリノベーションとともに避難経路の再編集の手法を提案し、卒業設計として取りまとめた。いずれも大変に優れた学術研究であり、「日本建築学会中国支部計画賞(卒業研究)」にふさわしいものである。
	広島工業大学工学 部建築工学科	齋藤晴香	福田由美子	共食の場に着眼した郊外団地の活性化に関する研究	本研究は、高齢化が進む郊外住宅団地における共食活動に着目し、その運営システムと効果を明らかにしようとするものである。他者が同じ空間で飲食を行う場を提供する活動を「共食活動」と定義している。具体的には1980~90年代に供給された広島市内の2団地における3つの活動を対象に、ヒヤリングおよび観察調査を実施し考察を行っている。 運営システムとしては、NPO運営と社会福祉協議会運営では、資金、活動場所、空間の使い方等に大きな違いがある一方で、食材の工夫などで共通点も見られ、いずれの活動も運営者側の地域に対する愛情が根底にあることが指摘されている。また、活動の効果として、運営者および利用者双方に満足感や自己肯定感の向上等が挙げられており、地域の居場所づくりやコミュニティ拡大に貢献していることが考察されている。 共食という行為から集会所等のコミュニティ施設の今後のあり方を探ろうとする意欲的な研究である。
	広島工業大学環境 学部建築デザイン学 科	川崎悠大	光井周平	旧江田島海軍下士卒集会所(海友舎)平屋建棟と桜松館との関係性	標記の研究は、広島県江田島市に現存する国登録有形文化財・旧江田島海軍下士卒集会所(海友舎)の平屋建棟とかつて広島県呉市に存在した旧呉海軍下士卒集会所「桜松館」との関係性について、実測調査ならびに文献調査により明らかにしたものである。 既往研究により、呉市の旧呉海軍下士卒集会所構内にかつて存在した木造の桜松館が、昭和4年に鉄筋コンクリート造で建て替えられた際に江田島に移築されたこと、防衛省防衛研究所に残された図面から、江田島に現存する旧江田島海軍下士卒集会所平屋建棟が木造の桜松館と平面形状や窓・玄関庇の意匠等がほぼ同様であり、移築の可能性が高いことが示されていた。 本研究では、新たに文献調査から木造の桜松館が桜井小太郎の設計によるものであることや、どのような経緯で呉から江田島に移築されることになったのかを明らかにするとともに、現地での実測調査により小屋裏で移築前の玄関部分の痕跡を発見したことなどが報告されている。 以上のような成果を踏まえて、現存する旧江田島海軍下士卒集会所平屋建棟はかつての桜松館を移築したものであり、桜井小太郎が設計したと確認できる現存最古の事例であることを明らかにしている。  丁寧な文献調査と実測調査に基づく考察が行われており、これまで不明な点が多かった桜井小太郎の海軍技師時代の活動の一端を明らかにした本研究は、学術的に高い価値を有していると言える。以上の理由から、川崎 悠大 君 が2024年度日本建築学会中国支部「計画賞」(卒業研究賞)に相応しいと認め、推薦するものである。
	山口大学工学部感 性デザイン工学科	藤原百那	白石レイ	インフォーマル居住者向け参加型集合住宅計画における増改築の現状-メトロマニラ Ernestville HOA の事例から-	本卒業研究は、フィリピン・メトロマニラにおけるインフォーマル居住者による参加型防災集団移転後の集合住宅の住環境に関して、増築等の住空間の拡張・変容に着目した緻密な事例研究を行ったものである。調査にあたっては、候補者は現地に2ヶ月と長期に滞在し、自身で調査許諾の取得等の住民とのネゴシエーションを行った上で、①住宅内の実測調査、②パブリックスペースの生活の表出についてのプロット調査、③調査対象とした住民組織212世帯の全世帯を調査対象とする悉皆的な半構造化インタビュー調査(結果として、一人あたり約20分×155世帯(73%)のインタビューに成功)を実施している。設定したテーマの社会性に加えて、彼女が収集した量的なデータとそれに基づく丁寧な分析は学術的価値が大いに認められ、卒業研究として非常に優れており、よって本研究を計画賞に推薦するものである。
	島根大学総合理工 学部 建築デザイン 学科	月川剛志	小林久高	出雲地方における紺屋の立地と作業空間の構成	本研究では生業空間である「紺屋」に着目し、様々な技法が伝承されている出雲地方において立地や空間構成を記録し、制作技術の視点から考察することを目的としている。対象地において作業空間が現存する5軒を対象に調査・分析を行った。 主な結果として 1.分布に関して、松江・出雲・安来など、かつての城下町や商業で栄えた地域に多く存在していた。 2.立地に関して、ほとんどが水利に適した立地であり、特に表紺屋は河川を作業に利用していた。 3.建物配置に関して、町場では直列型で作業動線が長く、農村では分散型で作業場等が近接していた。 4.作業空間に関しては、染色手法によりの染場と干場の装置が異なっており、また採光と通風に関する配慮も見られた。 失われつつある伝統的な生業空間の記録を作成し、その形成要因について検討を加えるもので、伝統技術の継承に向けても効果的な調査手法となっている。 以上より、卒業研究賞に該当するものとして推薦する。

学校名	氏名	研究題目	担当教官	推薦理由
岡山大学・工学部・工学科 環境・社会基盤系 都市環境創成コース	前田 雛	水辺空間における地域コミュニティに資するアートプロジェクトの手法と評価に関する研究 - シドニー市のSculpture by the Seaを対象にして -	堀 裕典	日本では社会課題の解決に芸術活動が活用される事例が多数見受けられ、パブリックアートから始まった公共空間におけるアート活動は広がりを見せている。本研究では、水辺空間を活用し地域のコミュニティに浸透するシドニー市のアートプロジェクト(Sculpture by the Sea以下、S×S)に着目し、主にインタビュー調査および文献調査を行うことにより、日本で行われるアートプロジェクトの課題解決に資する手法やその評価方法の知見を得た。その結果、日本で未普及の資金システムとして、彫刻の販売システムを導入しており、作品自体をその場で購入できる他、作品の小型版を低価格で販売することで、地域の方々や来訪者が購入しやすい仕組みとなっている。なお、評価手法については、「企業」に対して来場者数、教育プログラムへの参加校数・参加人数、SNS での反応、メディア掲載数などを数値化したレポートを作成していた。以上より、SNS などを含めた定量的な指標を作成する必要があると示唆された。
岡山県立大学デザイン学部建築学科	橋本七海	中山間地域の小規模集落における棚田の整備維持のあり方および風景と人の関係性に関する研究 - 吉備中央町富永森上地区の棚田の整備維持状況とその変遷を通して -	向山 徹	著者は、日本の中山間地域の耕作放棄地や森林化が目に見えて増化し、厳しい棚田の現状が広がるなか、棚田の整備維持が持続的にされなければ棚田は徐々に耕作放棄され、中山間地域の多面的機能は損なわれ、棚田によって維持されてきた環境は失われていくことに大きな危機感を抱いた。吉備中央町の棚田の整備状況をつぶさに観察し、法整備状況なども調査するに従い、他律的な法制度だけでは中山間地域に多く存在するありふれた棚田は守り切ることができないという現実に至る。法制度だけで棚田を支えるのではなく新しい視点から再度日本の中山間地域における棚田の風景を見直すことが大切であり、それは人と風景の関係を利他的な視点から丁寧に構築する必要性にあるのだということを導き出した。景観ではなく風景であることで多方面から通時的に中山間地域にある棚田と向き合い、これから棚田の風景と人がどのような関係性を保つべきかを考察している。そして、単なる方法論的な考察に陥らず、棚田の始原にまで立ち返る歴史、棚田の形状変化と耕作技術、地元の方々との対話、水利技術と棚田の変化、など地道な調査と実測を通じて、炙り出されるように「風景としての棚田」「有機的な建築としての棚田」「先人からの私たちへの受け渡しの結晶としての棚田」という共有資源としての棚田の存在を描写している。
岡山理科大学工学部工学プロジェクトコース	穴吹耕之輔	近代における五福通りの町家の軒切りについて	江面嗣人	本研究は、観音院の門前町を基盤に発展した西大寺地区を対象に、近代における道路拡幅が行われた町家について実測調査を実施し、軒切り等によってどのように道路拡幅が行われたのかを明らかにすることを目的とした。軒切りのほか、セットバックや看板建築の方法、それらの組合せによって道路拡張が行われたことを実測によって実証的に明らかにし、場所によってその組合せが異なることを明らかにした。これにより、町家が形成される背景や、それによって町並みにどのような変化があったのかを明らかにした。

## 修士論文賞

学校名	氏名	研究題目	担当教官	推薦理由
近畿大学大学院システム工学研究科建築コース	田中碧衣	食産業で形成されるテリトリーオに関する研究 —— エミリア・ロマーニャ州を事例として	樋渡 彩	本研究はイタリアのエミリア・ロマーニャ州を対象として、食産業を軸とした地域構造(テリトリーオ)を考察するものである。「テリトリーオ(territorio)」とはイタリア語で地域の繋がりを意味し、土地や土壌などの自然条件の上に、人間の手による文化的景観、歴史、伝統、食文化などが結びついて成立した一帯をいう。従来の建築史分野では建物単体を、都市史分野では都市や農村の単体を扱う傾向にある。また、都市計画分野では自治体の枠組みで扱われることが多い。それに対し、本研究は都市と都市、都市と農村など地域一帯の繋がりを読み解く新たな試みである。イタリアを代表する生ハム、チーズ、ワインなどの食産業に着目し、原材料の供給地や生産工程を把握し、パルマを中心とした周辺地域との繋がりを可視化した。こうした人の暮らしに深く関わる食の視点から地域構造を捉えることで、新たな地域の見方を提示できると考えられる。
広島大学大学院先進理工系科学研究科建築学プログラム	西岡航生	川上から川下の連携による住宅供給団体に関する研究 - 地域産材の利用と再造林の実施に着目して -	角倉英明	生産資源の中でも再生可能なものとして期待されている一つが森林資源である。このことを踏まえて環境との関係を見直した21世紀にふさわしい住宅・建築生産のあり方を解明していくことが期待されている。そのためには主伐後の再造林の促進が求められるが、従来型の木材流通の多段階性が再造林の停滞要因となっているとされる。こうした中で、西岡航生君は、産直住宅など川上から川下の連携による住宅供給団体を糸口にして、地域産材利用が積極的な団体の傾向とともに地域産材の利用方法のあり様を明らかにした。さらに団体における再造林の現状を明らかにしたうえで、団体と再造林の実施との関係について考察を行った。本論文は建築計画学の発展につながる大変優れた学術研究であり、「日本建築学会中国支部計画賞(修士論文)」にふさわしいものである。

学校名	氏名	研究題目	担当教官	推薦理由
山口大学大学院創成科学研究科建設環境系専攻	藏重晴香	ポートランド市におけるストリートを中心とした建物低層部デザイン規制に関する研究-セントラルシティ計画地区を対象に-	宋 俊煥	本研究は、車中心から人中心の空間への転換を目指し、歩いて暮らせるウォークアブルな都市づくりが注目される中、道路空間と建物低層部の連続性を保ちながら、一体的な空間整備を促す米国・ポートランド市の取り組みに焦点を当てたものである。具体的には、ポートランド市のデザインコード等の法制度の体系化と共に、デザイン規制が建物低層部の整備に与える影響を明らかにしている。調査にあたり、候補者はポートランド市都市計画・持続可能性局(BPS)の担当者へのヒアリング調査や2年間の現地調査を実施。対象地域であるセントラルシティ計画地区の81街区(60m×60m、405建築物)において建物低層部の実測調査を行い、その特徴を詳細に分析した。研究成果として、用途地域制のみでは低層部のデザインを誘導に限界があることを指摘し、ポートランドにおける建物の低層部に限定した段階的なデザイン形態規制の有効性を示唆している。この綿密で丁寧な分析は学術的価値が高く、修士論文として極めて優れた研究であることから、本研究を計画賞に推薦する。
島根大学大学院 自然科学研究科 環境システム科学専攻 建築デザイン学コース	桐岡真歩	温泉津町重伝建地区における近年の地域活性化の実態-空き家活用を行なう民間企業を中心として-	小林久高	本研究は、山陰地域において民間企業が主体の空き家活用を伴うまちづくりが積極的に行なわれている温泉津重伝建地区に着目し、その経緯や建築物の改修実態等を明らかにすることを目的とする。独自の取り組みが地域に与える波及効果について、現地調査により集落図と物件の改修内容等を確認し、関係者への聞き取り調査を行った。その結果、民間企業による取り組みを契機に「分散型ホテル」の形式により地域資源を活用した観光スタイルの多様化が進んでいることが明らかになった。また、民間企業による外来者への支援や橋渡しにより人々の関係性が構築されてきており、地域活性化のモデルとして今後の展開が期待できる地域であることが確認できた。民間企業が主体となる地域活性化において、地元住民、移住者、行政などの関係性のあり方の可能性を示すものであり、今後の方向性を検討するうえでも貴重な報告である。以上より、修士論文賞に該当するものとして推薦する。
岡山大学大学院環境生命自然科学研究科環境生命自然科学専攻 機械システム都市創成科学学位プログラム 都市環境創成学コース	Pual Pheinsusom	Design Guidelines Revision and Design Review for Urban Transition Areas: A Case Study of Seattle's Uptown Neighborhood	堀 裕典	本研究は、アメリカシアトル市、Uptown地区におけるデザインガイドラインの改定に関するプロセス、市民参加、裁量的なデザイン審査に関して、その実態を明らかにしたものである。Uptown地区について、南はダウントウン、北はクイーン・アン地区(高級住宅街)であり、高低差もあることから、商業・業務から住居用途のみならず、建築物の高さやボリュームについてもトランジション地区として、様々な意見が出され調整が難しい地区である。調査は、新旧デザインガイドラインの比較、シアトル市提供資料による文献調査、現地調査、デザイン審査の議事録からの要素抽出などによった。その結果、ガイドラインの改定においては、地域コミュニティからの重要な意見が反映され、地域との連携が強化されていた。なお、個別プロジェクトからの議事録から抽出した要素分析からは、バラバラに議論されていたトピックが、デザインガイドラインの改定によって、特定の要素に収斂されていることが明らかとなった。
岡山県立大学デザイン学研究科デザイン工学専攻	安田有喜	作庭家・重森三玲が設計した近代茶室に関する研究-天籟庵・無字庵・好刻庵について-	福濱嘉宏	作庭家として有名な重森三玲の茶室の設計について研究した。まず、重森の、作庭、いけ花、日本画に対する、重森の学修を分析することで、そこから受けた影響を検証した。次に、若年時の流派である不味流の茶室である菅田庵や明々庵と重森の設計を比較し、当該流派の影響について考察した。さらに、三玲が自らのために設計した天籟庵(1914年)、無字庵(1953年)、好刻庵(1969年)を個々に分析し、それぞれの茶室における造形的要素を作庭で多用するデザインエレメントと比較、検討することで、その創作の特徴を明らかにしようと試みた。その結果、三玲は、伝統的な茶室建築の形式を逸脱することなく、現代芸術に沿った抽象的な表現を要素として茶室に取り入れていることを明らかにし、重森三玲の茶室は、現代の茶室における転換点の一つであると位置付けた。
岡山理科大学大学院理工学研究科 修士課程システム科学専攻建築学コース	練苧凌平	公共・大学図書館における開架書架廻りの新たな傾向に関する研究	平山文則	本稿は、近年の図書館書架形状、配置に変化がみられる図書館が雑誌で数多く見受けられるようになり、図書館に変化が起きてきているのではないかとの予測により始めた研究であるが、効率性や管理のしやすさと相反する本の存在を展示物的に見せる傾向が想像以上に進展していることを定量的に把握しており意義がある。特に導き出された以下の3つの知見は、今後の図書館の計画・設計に役立つことから「計画賞」に推薦する。時代が降るにつれて、壁式書架比率が上がり、単位面積当たりの蔵書密度は下がっている。それらの変化を、本稿で定義した指標で説明することが可能で、4つに類型化でき、従来型の書架形式のグループを中心に特徴的な3つのグループが近年発生している。その要因は類型ごとに大きく異なり、本の存在を展示物的に見せるグループは、「本の囲まれ感」、「選書の楽しさ」、「知の集積の可視化」を重視しており、書架形状・配置が図書館全体の設計趣旨に大きく関わる。